釋は鳥山氏の苦勞せるに比してや、疏略ではなからうか。南京南海府、これに就ては松井、鳥山兩氏と同じく咸鏡北道鏡城灣を「似可假定在此」(同上十二葉)といつたり、又朝鮮北青郡新昌(鏡城の南)がそれかも知れぬ(同上十二―十三葉)といつたり、又東國輿地勝覽五十所載咸鏡北道鍾城府之古跡に南京と稱する處あり或はこれであらうか(同上十三葉)など頗る氣が多い。因みに最後の説は我が内藤博士が日本滿洲交通略説(叡山講演集)の中に既に説かれた所である。然るに以上諸京の比定の如きは文獻に就て如何に考究するも所謂机上の空論に過ぎざる事が多い、か〻る問題は實地踏査の結果と相俟つて正鵠を期するに庶幾らう。

以上が金氏の論説の一斑である。然しこの書の特徴は論説よりも寧ろその史料集たる點に在る。史料集として本編は完璧に近い。非常に便利な本であることを申添へて諸士に御薦めする次第である。(大連右文閣發行、一帙十本價八圓)(外山)

●Peter Rassow; Die Kaiser-Idee Karls V. dargestellt an der Politik der Jahre 1528–40. (Historische Studien 217.)

フリードリッヒ、マイネッケにデディケイトされたる本書は著者の序文によれば中世的皇帝問題への一寄與として書かれたものである。一五二八―四〇年に限つたのは一五二八年の皇帝計畫に始まり、一五三八年 Niece, Aiguesmortes に於けるフラン

ソワ一世との和解に至る期間は皇帝の理想が最も純粹に、かつ最も有效に實現せられたといふ著者の見解によつたためである。アウグスブルグ帝國議會(第二章)、一五三二年のトルコ遠征(第三章)、フランスとの Entente (第四章)、一五三六年復活祭月曜日カール五世のローマに於ける祝賀演説(第五章)がか〻る實現への階段をなしてゐる。著者が個々の事實の敍述を精神史的意味附けと結びつけてゐる點は秀れてゐる。

事實敍述の部分は特に成功してゐる。史料、文獻の選擇及び評價は誠に適切であり、重要なるものとしからざるものとの區別も正確である。無味乾燥なる公文書史料も色彩と生命とを得てゐる。一五三三―三四年のフランスに對する親善政策はフランソワ一世と Entente への最初の眞面目なる試みであると理解してゐる。亦多くの挿話的部分は例へばプロヴアンスへの遠征(一五三六年)の敍述の如く全體の敍述を生かしてゐる。

著者の見解によれば、この時代に於てはカール五世の中世的宗教的、世界的なる皇帝理念とフランソワ一世の近世國家理念とが對立し、兩者の間にクレメンス七世及びパウル三世等ルネサンス法王の römische Prinzip が存したとする。この理念の對立は絶對的である。最初皇帝にはその反對者の政治原則に關する理解は少しもなかつた、彼はフランス王及び現實主義的政策を主張する彼の臣下とは別の立場に立つてゐた。彼は自らの基督教的形而上學(S. 235)によつて時代の敵となつた(S. 270)。か〻る傳統的皇帝理念が全くカールの世界政策的任務を決定し

た。彼は皇帝權をば Universita christiana に對する奉仕と考へたのである。彼にとつての最終目的は基督教世界に以前の秩序を回復することであり、そのためにはトルコ人討伐、宗教分的裂の除去、一般的教會改革を必要とし、その實現にはフランス及び法王の協力を必要とした。Niece, Aiguemortes に於て皇帝は目的に到達したと信じた。

皇帝理念をばカール五世の政策の中心に持ち來したことは著者の功績であり、この皇帝理念が政治的見解と共に彼の一般的見解を支配してゐるといふ點同感である。それは ein Irreales, Doktrinäres, Ideologisches なるものであり、近世的な現實政策權力政策とは一致し得ざるものである。

著者の見解には二つの誤謬がある。一つは現實的政策とカール五世の政策のごとき理念的政策との絕對的矛盾性に對する頑固なる確信である、著者の見解に關らず(s. 183)彼の王家的名譽慾には權力意志や野心が強く働きかけていることは確かである。著者が皇帝をば盲目的イデオローグとして、空論政治家として、帝位のドン・キホーテとして取扱ふに於て(s. 112, s. 123, s. 341)反對說が提出される。この「封建的國家理念の最後の代表者」(s. 224)も亦國內政策に於ては Souveränität, Staatsraison の原則を承知してゐたのである。皇帝が絕えずフランスとの和解に努力したことには現實政策的根據がある、フランスの反對は彼の世界計畫の貫徹の邪魔である故何等かの和解に達せんとしたのであり、この政策は成功したのであつた。

次に著者のテーマの時期制限の根據が充分でない。一五三八年以後の皇帝理念の衰退については說かれていない。かへつて以後の時代がその眞の實現期と考へられる。(トリエント會議、シュマルカルデン戰爭、アウグスブルグ假規定)

最後に „Realpolitik“ についてのアカデミックな概念を十六世紀の政治的宗教的事件にそのまゝ用ひることは誤解を招きやすい。この世紀の問題は勿論「現實政策的」には誤決出來ないけれども、現實性を缺いてゐるとは考へられない。カール五世に於ては世界主義的見解と權力政策的見解が緊密に結び合つてをり、後者を除き得る場合のごときは殆んどないのである。

(Hist. Zeitschrift Bd. 148. Fritz Walser 氏書評による。)

(Berlin, Ebering 1932. IX u. 452 S. 18 M.)　(鹽見)

●天皇と國史の進展　中村直勝著

「日本の歷史は必ず天皇を中心として進展して行く、……其時代の最も進んだ文明は、常に必ず宮廷に在る。言はゞ天皇が一番進んだ文化の所有者であると申してもよい。」これは中村助教授が平素講壇に於てまた座談に於て常に後進に說かるゝところの持論である。それは氏の國史の研究に於ける最初のライトモティーフであると共に、またその結果として常に新しくその意味を深めらるゝ所の信念である。この度公にせられた氏の新著は、一にかゝる主張を具體的に示さんが爲に御歷代の中より宇多、醍醐、後白河及び後鳥羽の四帝を擧げてその御事歷を考へその國史の進展の上に有せらるゝ大いなる意義を明かにせられ